学生海外調査研究	
モロッコにおける前近代のイスラーム法学者とそのネットワーク解明に向けた史料調査	
氏名　野口　舞子	比較社会文化学専攻
期間	2015 年 11 月 14 日～2015 年 11 月 28 日
場所	モロッコ王国ラバト市、フェス市
施設	国立図書館、王立図書館等

内容報告

1. 海外調査研究の目的と内容

本海外調査は、平成 26 年度に実施した海外調査研究の続編として位置づけられ、前年度調査で入手した写本（手稿本）史料について、現地研究者の助力を得ながら読解することを第一の目的としたものである。調査は主にモロッコ王国ラバト市で、各地図書館での史料調査や研究者との面会を行い、加えてフェス市、マラケシュ市郊外のグマートで現地調査を行った。なお、報告者の関心と海外調査、および写本史料については、前年度調査報告書でも詳述した（http://www-w.cf.ocha.ac.jp/leader/wp/wp-content/uploads/2015/03/1 野口舞子.pdf[1]）。

報告者の関心は、11 世紀から 13 世紀のマグリブ（北西アフリカ）・アンダルス（イスラーム政権支配下のイベリア半島）におけるベルベル支配者との被支配者の関係にある。この時代、マグリブ地域は北アフリカの先住民であるベルベル部族によって、イスラーム到来後、初めて統一された。彼らはアンダルスまで領域を拡大し、帝国とも呼びうる広大な地域を支配した。この中でもサンハージャ系ベルベルによって興されたムラービト朝（1061－1147 年）は、同部族がサハラ砂漠西部の出身であったことから、実質的にはマグリブやアンダルスの人々にとって外来の支配者だということができる。サンハージャ系ベルベルは主に軍事支配者層をなしたが、彼らが広大な地域をどのように支配したのか、また被支配者とどのような関係を築いたのか、というところに報告者の関心がある。他方で、ムラービト朝は正統スンナ派の法学派のひとつであるマーリク派法学を採用し、マグリブ地域におけるスンナ派のイスラーム化を促したと評価される。王朝の下でウラマー、とりわけ法学者は重用され、政治的にも大きな影響力をもった。このため、報告者は軍事支配者と、被支配者である民衆、そして両者の仲介者としてのウラマーという関係を措定し、これまで支配者とウラマーにそれぞれ焦点を当て、研究を進めてきた。

ムラービト朝期のウラマーに関しては、王朝のマーリク派法学採用と司法行政への法学者の登用が注目され、これまで多くの研究がなされたが、多くの場合、法学者として対象とされたのはアンダルス出身者であった。これらの議論では、当時マグリブの学問状況は発展途上であり、同地のウラマーや法学者は、学問の先進地域であるアンダルスの知識を受容するだけの存在として等閑視されてきた。しかし、アンダルス征服に先立つマグリブ地域の征服と支配を、王朝はどのように行ったのか、またマグリブのウラマーとどのような関係を築いたのか検討することは、通時的な王朝の支配のあり方を理解する上で欠かすことができない。以上の問題意識から、マグリブ出身のウラマーの状況を明らかにするため、報告者はイブン・ハマーダ Ibn Ḥamāda（没年不明、12 世紀の人）によって著された『知識の提要（以下、提要）[2]』写本に注目した。この史料は、セウタ（北アフリカ側にある現スペイン領）出身でムラービト朝後期に活躍した法学者カーディー・イヤード Qāḍī ʻIyāḍ（1149 年没）による『マーリク派の偉人を知るための知識の整序と理解の近道（以下、知識の整序）[3]』という伝記集の要約と補遺に相当する。『知識の整序』はマグリブで著された最初の伝記集であり、イスラーム世界全域のマーリク派法学者を対象とし、学祖マーリクとその仲間からイヤードの時代までを世代（ṭabaqa）順に収録する。法学者の学問修得のみを記述するのではなく、政治・社会的な事象についても独自の情報を多く伝える貴重な史料である。イブン・ハマーダはカーディー・イヤードの弟子とされ、『提要』からも『知識の整序』同様にマグリブの法学者の情報が得られる。しかし、当該史料はこれまで部分的に校訂・出版されただけで、史料の全体像が不明なまま研究者に利用されてきた。

報告者は前年度の海外調査で当該写本を入手し、本年度は手稿の解読が難しい部分やアラビア語の理解が困難な部分を現地研究者と読み、史料の全体像の把握に努めることにした。以上の史料分析に加え、現地研究者と面会したり最新の研究を入手したりするため、2015 年 11 月 14 日から 11 月 28 日にかけて、海外調査を行った。

2. 海外現地調査の概要とその位置づけ

本調査は主に（1）史料分析（2）現地調査（3）史資料収集および研究状況調査の三つからなる。なお、今年度の調査も図書館での史料調査に多くを費やしたが、入館手続きや史料閲覧手続きに関して前年度と重複する部分は省略し、今年度新たに調査を行った図書館や必要がある場合はそれらを記すことにする。

2.1 史料分析

本調査では、写本史料『提要』とその他のアラビア語史料に関して、留学中にアラビア語の指導をうけた専門家に、文字の書き起こしの確認とアラビア語の教授を依頼した。すでに記したように、前年度調査で入手した『提要』写本は、モロッコ王立図書館 Bibliothèque Royal（**通称ハサニーヤ図書館**：al-Khizāna al-Ḥasanīya）所蔵の 140 葉余の写本である（写本番号 672）。紙の端や見開きの中央部に虫食いがあるほか、経年などによって文字が滲んだり色が薄れている部分もあるが、基本的に文字はマグリブ書体で丁寧に書かれている。当該史料は、イヤードのマーリク派法学者伝記集『知識の整序』の続編にあたる伝記集で、『知識の整序』に収められている法学者の伝記記事の抄録や追記と、収められていない者の伝記記事の追加となる。今回の調査では、報告者が対象とする時代に近い、より新しい時代について書かれた写本後半部分について教授を依頼した。なお、『知識の整序』校訂本（第二版、1983 年ラバト刊行）には、最終巻である第 8 巻の末尾に『提要』同写本の校訂が補遺として収録されている。この部分は今回読み進めた部分とほぼ同じ部分であり、同校訂本を参照しつつ読解を進めた。

写本の読解は、アラビア語テキストの書き起こしに始まり、内容理解を経て、データ分析を行うことからなる。写本の読解におけるアラビア語テキストの書き起こしや内容理解は、アラビア文字を読むだけでなく、アラビア語文法やイスラームの知識も必要である。書き起こした文字の確認に加えて、こうした事柄への理解を深めテキストを正しく理解するためにも現地の人と一緒に史料を読むことは意味のあることであり、今回の調査でも色々な知識を得ることができた。今回の調査では時間の制約などもあり、写本の全てについて検討することはできなかった。また、これまで分析できた範囲では、校訂本に記載されていない見出し項目（法学者名）は見つかっていない。しかし、見出し項目の脱落や省略はないものの、記述内容に関して、現行の校訂本では写本の読みづらいところや語句について省略している部分が多く存在することが明らかとなった。当該校訂本は、研究者によって最も使用されているものであるが、『提要』の校訂部分も無批判に使用されてきた。また、当該『提要』写本入手後に、これまで知られていなかったエジプト写本の存在がインターネット上で明らかになった。それとも照合しながら読解をおこなった結果、両写本の間にも情報の違いがあることがわかった。

当該写本調査は今後も継続することとし、『提要』の全体の把握に努めたい。同時に、現行の校訂本の状況から、今後は『提要』の底本となっている『知識の整序』についても写本を参照していく必要があると感じている。最終的には『提要』史料を校訂するということも視野にいれて研究を進めたい。これは、マグリブ・アンダルスのみならずイスラーム世界全域のマーリク派法学者の解明に資する意義深い研究となるだろう。なお、調査では『提要』以外の伝記集や君主鑑などの史料についても教授を得た。

2.2 現地調査

2.2.1 アグマート

現地調査は、モロッコ南部のグマート Ghmat（旧名アグマート Aghmāt）、およびフェスの二つのまちで行った。アグマートはマラケシュの南南東 30 キロメートルのところに位置する田舎町であるが、古くは交易路上に位置し商業地として栄えた。ムラービト朝期には、都マラケシュの建設（1070 年頃）前に、都としての機能を果たしており、その後もしばらくは都と同様の機能を果たし、14 世紀くらいまで繁栄していたと考えられている。現在は、当時の町の中心地とわずかな歴史的建造物が遺跡として残る他は殆ど何もなく、生活の場としても近代的なスーパーなどもない、空気と水が綺麗な田舎町となっている。他方で、アグマート遺跡に関しては、2005 年から毎年一定期間発掘調査が行われており、本調査時は発掘調査の最中であった[4]。以前面会したことのあるアルジャディーダのシュアイブ・ドゥッカーリー大学のフィーリー‘Abd Allāh Fili 教授が中心となって発掘調査を進められており、今回の調査に際し同教授に連絡をとったところ、厚意で発掘現場を見学する機会を得た。以前、発掘調査の状況を知らずに訪れた時は、遺跡南部のハンマーム（共同浴場）のみ見学したのだが、今回は西部

の宮殿およびモスクの様子も知ることができた。遺跡を歩き、フィーリー教授の説明をうかがううちに、相当大きな都市であったことがわかった。特に、ハンマームについては北アフリカ最大の規模ということであった。ムラービト朝期のアグマートの重要性については、これまで指摘している研究があまりなく、報告者も同地の位置づけに悩んでいたが、この訪問によって非常に重要な役割を果たしていたことが明らかとなった。

今回の調査では、発掘調査の責任者であるフィーリー教授に面会できたことで、遺跡の修復状況や発掘の資金・運営状況などについても聞くことができ、短時間でも非常に有益な時間をもつことができた。また、調査中の現場を見学できたことも大きかったが、考古学の研究者と関係を築けたことは何よりも貴重である。

2.2.2 フェス

モロッコ北部の内陸に位置するフェスも古都の一つで、モロッコで一番古い王朝であるイドリース朝（789-926 年）の都として建設された。カラウィーイーン・モスクは（859 年もしくは 856-7 年）に建設された後、11 世紀後半から 12 世紀前半のムラービト朝の支配によって、モスクの改修も行われた。以上は歴史的な文献から知られていたが、近年、カラウィーイーン・モスクの発掘調査によってムラービト朝よりも古く 9 世紀から 10 世紀には、すでにモスクの改修や装飾が行われていたことが明らかになった [5]。こうした状況をうけて、今回改めてフェスの旧市街（メディナ）を現地調査することとした。カラウィーイーン・モスクはムスリム以外の立ち入りを禁止しているので、発掘調査が行われた場所がどのようになっているのか残念ながら見ることはできないが、旧市街を歩き回るだけでも古い時代の町の様子を知ることができる。

フェスの旧市街は世界遺産に登録されており、古くからの地名や建物が多く残っており、伝統的なイスラーム都市の景観をとどめていると言われる。入り組んだ街路と低い家によって構成された旧市街は、よく迷宮と表現され、歩くのに一苦労する。フェスを訪問したのは数年ぶりであり、商店街や住宅の様子は以前と変わらないのだが、色々なところに観光者用の目印や建物紹介の看板などができていた。また、至るところで建造物や広場の修復作業が行われており、数年前と比べ便利に、そして小綺麗になった印象をもった。フェスの現地調査ではカラウィーイーン図書館 Maktabat al-Qarawīyīn（カラウィーイーン・モスクの複合施設の一部）でも史料調査を行った。

今回の現地調査でも明らかになったように、近年、モロッコやスペインにおけるイスラーム考古学の進展とその成果については著しいものがあり、モロッコでも現地研究者がフランスやスペインなど各国の研究機関・研究者とプロジェクトを組織して各地で調査を行っている。今回面会したフィーリー教授も前近代の遺跡の発掘について複数のプロジェクトを掛け持ちしていた。文字史料が残っていない時代や地域についても、考古学的な成果によって新たな発見が続いており、これらの成果を無視することはできない。このような状況に対し、歴史家は今後どのような関係を築いていくべきか、考古学的成果の単なる利用で終わらないためにはどうしたらよいのか、今回の調査で改めて考えさせられた。もちろん、文献史料を読み解くことによって考古学に貢献できることもあるだろう。学問領域の垣根を越え、常々協力関係を築いていくことが大事だと改めて感じた。

また、現地調査（町歩き）に関係して、モロッコ王国全体の経済発展と各地のミクロな経済活動の関係も気になった。同国の経済自由化と発展を受けて、フェスやマラケシュの旧市街地区から少し離れたところには、外国資本の大型商業施設が建ってきている。こうした商業施設に入り現代のモロッコ人の志向の変化を目の当たりにすると、旧市街とのコントラストが感じられた。旧市街に残る伝統的な商店街は次第に姿を消してしまうのか、それとも旧市街は観光用歴史地区としてのみ残るのか。一般の人々の生活の場である旧市街が今後どのように変化していくのか考えさせられた。

2.3 史資料収集および研究状況調査

2.3.1 史資料収集

史資料収集は各図書館およびラバト市内の書店で行った。史料を有する図書館としては、フェスのカラウィーイーン図書館、ラバトの王立図書館、国立図書館を訪問した。ただ、カラウィーイーン図書館は、ちょうど改装工事中で図書館を利用することはできなかった。なお、改装期間は一ヶ月程度ということである。当該図書館はウェブサイトなどを有しておらず、現地に赴かないとこのような状況は不明であるため、訪問して初めて休館中ということを知ったが、館長のバクシューフ‘Abd al-Fattāḥ Bakushūf 氏および副館長のジャアワーン Abū Bakr Ja‘awān 氏らと面会することができた。また、ラバトのモロッコ王立図書館、国立図書館へも赴き、史料調査を行った。これらの図書館の入館方法は前年度報告書に記載した通りで特に変更はない。ちなみに、王立図書館では前年度調査の際に入館証を作成したものの滞在中に受け取れなかったのだが、今回の調査では無事受け取ることができた。一度作成した入館証は 3 年間有効である。王立図書館では、事務局長のヒターリー‘Abd al-Majīd al-Khitālī 氏にお世話になった。カラウィーイーン図書館や王立図書館に関しては、突然の訪

問にも関わらず色々な資料を提供いただき、感謝の念に堪えない。

以上に加え、ラバトのムハンマド五世大学やラバト市内の書店でも史資料収集を行った。ムハンマド五世大学は、アグダル地区の文学部図書館に赴いたが、この際、身分を証明する書類の提出が必要であった。当該図書館では、特に同大学に提出された博士論文について調査を行った。この調査で有益だったのは、モロッコの各大学に提出された人文系の博士論文目録である。これらを通じて、博士論文執筆に有益な史資料を多く見つけることができた。

2.3.2 研究状況の調査

今回の調査の目的は、写本の読解や史料の入手に加え、博士論文執筆を見据え、モロッコにおける研究状況を把握することにあった。具体的には現地研究者と面会し、最新の研究状況を把握したり、自分の博士論文の方向性について助言を求めることを意図していた。考古学のフィーリー教授に加え、前年度調査でも面会したムハンマド五世大学歴史学科のブーシャントゥーフ Lotfi Bouchentouf 教授に今回もお会いした。ブーシャントゥーフ教授からは、博士論文執筆に関し具体的で有益な助言を数多く提供いただいた。

前年度の書店調査では、報告者の研究対象に関係する研究書は数年前からあまり増えていない印象をもったが、今回の調査では、これまでの調べ不足を痛感した。これによって、前近代の歴史を専門とするモロッコ人研究者数名を新たに知ることができた。こうした研究状況の調査から感じたのは、継続的に研究者を輩出するモロッコの歴史学界の層の厚みである。モロッコ人歴史研究者の研究手法の確かさはすでに評価されているが、それらは脈々と若い世代に受け継がれているように感じた。今回の調査では新たに業績を知った研究者と面会する機会や時間はなかったが、今後、これらの研究者とのネットワーク構築を行いたい。

最後に、本調査出発の前日である 11 月 13 日に、パリの同時多発テロが発生した。報告者が利用した航空会社がパリ経由のものだったので、14 日の出発当日も成田空港は報道関係者で騒然としており、このタイミングでの渡航に少々不安を感じたが、パリのシャルル・ド・ゴール空港、ラバトのラバト・サレ空港ともにチェック体制について特に厳しさは感じなかった。また、モロッコ国内の移動や調査もとくに問題なく行うことができた。他方で、犯人の一人がモロッコ系ベルギー人だったこともあり、モロッコでもテレビ、新聞・雑誌などの各種メディアで連日当該事件が取り上げられていた。

3. 今後の展望

当該調査の成果については、今回得られた史資料から、ムラービト朝後期の法学者のネットワークに関して研究をまとめる。この分析結果は、2016 年度の中東学会年次大会において報告し、査読誌の投稿論文として投稿し、博士論文の核となるよう組み込む。博士論文の内容に関しては引き続き検討を加えていくものの、当該調査を踏まえて対象はムラービト朝期に絞り、王朝の支配や政治権力の確立の過程を在地住民との関係から検討することにする。

他方で、イブン・ハマーダの『提要』写本については、今後も書き起こしと読解を続け、データベース化を行うこととする。また、現地研究者と断続的に連絡をとり、国内だけでなく国際的にも通用する研究となるように研究の質を高める。また、当該写本の重要性から、写本に関する分析については、海外の研究者にむけて英語で執筆することを考えている。

注

1. 2015 年 12 月 25 日最終閲覧。
2. Ibn Ḥamāda, *Mukhtaṣar al-madārik*, al-Khizāna al-Ḥasanīya, ms.672.
3. ʻIyāḍ b. Mūsā, *Tartīb al-madārik wa taqrīb al-masālik li-maʻrifat aʻlām madhhab Mālik*, ed. by S. A. Aʻrāb et al., 8vols., Rabat, 1983.
4. アグマートの発掘調査と運営財団に関しては以下のウェブサイトを参照のこと。http://aghmatarchaeology.org/home/（2015 年 12 月 25 日最終閲覧）
5. Aḥmad Ettahiri, À l'aube de la ville de Fès: Découvertes sous la mosquée al-Qarawiyyin, *Dossiers d'Archéologie*, 365, 2014, 42-49.

参考文献

白谷望（2015）『君主制と民主主義　モロッコの政治とイスラームの現代』風響社.

松原康介（2008）『モロッコの歴史都市　フェスの保全と近代化』学芸出版社.

Hendrickson, J. N. & Adil, S. (2013) "A Guide to Arabic Manuscript Libraries in Morocco: Further Developments", *MELA Notes: Journal of Middle Eastern Librarianship* 86, 1-19.

Hendrickson, J. N. (2008) “A Guide to Arabic Manuscript Libraries in Morocco, with Notes on Tunisia, Algeria, Egypt, and Spain”, *MELA Notes: Journal of Middle Eastern Librarianship* 81, 15-88.

のぐち　まいこ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

写本には、テキストの内容以外にも、写本自体の成立や伝授に関する情報が記載されていることもあり、モノとしての写本の情報に着目した写本学 codicology という研究分野が注目されている。また、考古学による遺跡や遺物などの研究は、文字資料が政治をはじめ有力者に偏りがちであるのに対し、日常の生活や社会に係る情報を提供する。今回の調査によって、写本や遺跡遺物に係る研究への糸口を得たことは、博士論文のみならず、長期的な研究の財産となる。

（基幹研究院人文科学系・三浦　徹）

Research on elucidating the networks and role of the *fuqahā'* in the pre-modern period in Morocco

NOGUCHI Maiko

This research is intended to elucidate the networks and role of the *fuqahā'*(Muslim jurists) under the Almoravid Dynasty (ca.1061–1147). The Almoravids were the first Berber Dynasty that united the area from the Maghrib to al-Andalus; the Iberian Peninsula under the Muslim rule. Previous studies have found that the *fuqahā'* of the Almoravids were incorporated as members of the judicial administration that authorized their rule. My research interests concern the relationship between the Berber military governors and the *fuqahā'*. To clarify why and how this cooperative relationship worked, I conducted the survey to read an unpublished manuscript and ask for advice on my dissertation from professors in Morocco.